

懺悔

挿絵 / 夏桜

どろろ  
がこの手に  
スズラン  
を

試し読み版



Contents

目次

第一話	招かれざる客	4
第二話	献身の裏で	70
第三話	絆の代償	140
第四話	植え付けられていた火種	185
第五話	その手が握るのは	238
最終話	守り抜いたもの	266

## 登場人物

Characters

### 源 杏

(みなもと あんず)

宗介と婚約中の武闘家少女。明るく快活な性格。華奢な身体つきだが巨乳であり、若さ溢れる色香を漂わせている。

### 千代田 宗介

(ちよだ そうすけ)

千代田流古武術師範。古風な義理堅い気質のため、杏とは清い交際を続けている。

### 久里須

(くりす)

元門下生の軽薄な男。「道場破り」として杏たちの前に現れる。



## 第一話 招かれざる客

道場の庭に咲いた桜の花びらが強めの風により、まるで踊るように空を舞っていた。二十代半ばで看板を引き継いだ千代田宗介が、桃色に染まった地面を竹箒で掃いていると、背後から呆れるような声が掛かった。

「宗介さん。そういうのは門下生に任せてください」

宗介は振り返らずに、箒で掃きながら苦笑いを浮かべた。

「門下生といっても君しかいないじゃないか」

「だから、あたしに任せてくださいって言うてるんです」

今度こそ声の主である源杏へと振り返る。唯一の門下生は両手を腰に当て、不満げに口を尖らせていた。宗介は掃除の手を止め、彼女に穏やかな微笑みを向ける。

千代田流古武術の教えでは、敵を友にする事が真髓とされている。それを体現するように宗介の纏う深い包容の笑みは、大抵の相手に安心感を抱かせるものだ。

だが、こと杏に限っては、宗介の視線に頬を紅潮させて目を逸らしてしまう。杏と対峙した他流派の武道家は例外なく彼女の気風をこう評する。

「背骨の代わりに日本刀が差し込まれているのではないか」と。

そんな彼女が直視を困難とするのは、長年想いを寄せる宗介の眼差しだけだ。

「もう大学から帰って来たんだ。早いね」

「卒論も終わってますからね。あと一年は顔を出しに行く程度ですよ」

「就職活動は？」

「もうその話は何度もしましたよね。宗介さんとこの道場を盛り上げていきます」

宗介はやれやれと肩を竦めると掃除を再開しながら論すように口を開いた。

「そんな甘いものじゃないよ。僕だってサラリーマンと兼業だ」

「あたしだって来年からはお嫁さんですよ？」

やや風は強いものの、四季の始まりに相応しい世界を祝福するような晴天だった。

そんな麗らかな陽射しに負けないほど、杏は晴れやかな笑みを浮かべながら控え目にピースをした。

とはいえ勢いで口にしたものの、やはり慣れないアピールは恥ずかしかったのか杏は耳たぶまで赤くなっていた。

杏が通り魔事件に遭遇したのは中学性の時だった。目前まで歩み寄る刃物を持った男の血走った目を、彼女は未だ忘れた事はない。

そして横から助けに割って入り、難なく凶刃を制した宗介の姿はより鮮明に記憶し

ている。

杏は如何いかに自身が無力であるかを嘆くと同時に、宗介が行使した人を守る武術に魅入られるように道場の門を叩いた。

彼の実力と人格に敬意を抱き、自身にはない静穏な物腰に異性として惹かれていくのにそう時間は掛からなかった。

入門当時は宗介にとつて杏はまだ幼く、妹弟子の一人としてしか見られていなかった。だが、成長期を迎えた彼女は日々武術の才覚と共に、女としての華を咲かせていった。

高校を卒業する頃には清々しい可憐さを伴うようになっていた。そのひたむきな瞳で恋心を告げられれば、どんな捌さばきの達人であろうと致命傷は避けられないだろう。秘めた想いはその高校卒業と同時に爆発し、一世一代の告白は実った。しかし宗介は、やはり門下生との交際は邪念を道場に持ち込む恐れありと危惧した。

それゆえ妥協案として、大学を卒業して社会人になるまでは、あくまでプラトニックな関係でいようと提案したのである。更にはその誓いが達成された時には夫婦となる約束も交わしていた。

真面目な二人はそれを三年貫き通し、そして最後の一年を迎えた。交際の三年で彼らが肉体的に触れたのは、稽古けいこ以外ではデートの時に手を握っただけで、それも数え

るほどしかない。

学校帰りであるワンピース姿の杏からは、まさにこれから食べ頃を思わせる青々しい色香が漂う。

華奢な身体つきささしやのわりには隠しきれない胸部の膨らみ。スカートから覗き見える締まった太ももは眩しいほどに白く、到底筋肉などついてなさそうな肉感を有している。小さな顔に気品のある目鼻立ちは、武道に似つかわしくないとさえ言えた。

艶やかな唇は控え目で、宝石のような瞳は意志の強さと同時に育ちの良さを表している。爛漫ではあるものの、どこか奥ゆかしい輝き。

流石さすがの宗介もそんな極上の果実を相手に、何度か性欲に負けそうになった事もあったが、それでも彼女を真剣に想う気持ちで自分を律していた。

「まあ実際のところ、道場はもう君に任せても良いだろうけどね。僕は依然としてこの体たらくだし」

そう言って宗介は右腕を持ち上げる仕草をしたが、その動きはどこかぎこちない。杏の眉根に微かな憂いが浮かんだが、すぐさまそんな機微を吹き飛ばすように胸を張った。

「その通り。宗介さんの技は全部あたしが引き継ぎましたから。だから安心してご隠居して、サラリーマンに専念してくださいよ」

その言葉は勝ち気な小娘による誇大妄言などではない。

一見細身にすら見える中肉中背の身体にはバネのような俊敏性が備わっていた。

なにより後遺症が残る怪我を負ったとはいえ、宗介に一線を退く決意をさせたのは、彼女が有する類い稀なほどの格闘センスだった。その源は神通力めいた眼力が生み出す反射神経にある。

飛翔する蠅を押し潰す事なく、そつと指で摘まんで捕縛する事すら可能な異才。更にはたゆまぬ努力を加え、入門して数年で既に免許皆伝の域に達していた。

宗介はそんな彼女を弟子として誇りに思うと同時に、彼女が恋人として、そして未来の伴侶として愛おしい存在に変化している事を日々実感していた。

杏に至っては年頃の女の子でもある。毎晩のように枕を相手に宗介とのキスの練習に励むほど、彼への想いは敬愛や性愛で破裂寸前の風船の如く膨張していた。

花びらが散ろうがすぐさま緑の葉で未来を薫らせる桜のように、二人に降り注ぐのは燦々とした陽光しか見当たらない。そんな日向に影を落とす声が不意に響いた。

「すんませえん。道場破りなんすけど」

先程まで杏が纏っていた少女然とした愛らしい雰囲気は完全に消え失せていた。

「師範。準備ができました」



道着である袴を着用して道場に顔を出した彼女は、宗介譲りの静かに研ぎ澄まされた鋭さを背負っている。

その闘気は道場に迎え入れた道場破りの男に注がれていた。千代田流はどんな挑戦からも逃げないという不文律が存在し、その精神は杏にも受け継がれている。

滅多にある事ではないが、他流派の看板を狙う腕自慢は時折存在した。しかしそれが元門下生だったのは宗介の知る限りは初めての事だった。

「相変わらず道場の中では師範呼びなんだ。いつもみたいに名前では呼べば良いのに。来年結婚だっけ？」

道場の中央で杏を待ち構えるのは、如何にも軽薄そうな、瘦身で上背のある男だった。赤いフランネルの柄シャツにダメージジーンズを召し、茶色の短髪に鬚髭あごひげを蓄えている。

「久里須くりす。確かあんた、あたしよりも年下でしょ」

杏が男の名を呼び、非難すると男はジーンズのポケットに両手をしまったまま愉快そうに笑った。

「この前二十歳になったばっか。なにに？ 成人のお祝いしてくれんの？」

杏の視線がより険しく男を刺すが、意に介した様子もなく笑みを浮かべ続ける。

「敬語とかもういいっしょ。俺もうこの門下生じゃないし。あんたの弟子でもない」

いんだしさあ。大体、追い出したのそっちだし」

背を壁に預けて立っていた宗介はその言葉に微動だにしなかった。傷跡が疼く事もない。責めるのであれば自身の至らなさしかない。

しかし杏はそこまで達観はできない。男が待つ道場の中央へと向かう足遣いには、ようやく忘れかけていた憤怒がふつふつと滾たぎっていた。

「卑劣な奴。正々堂々だと勝てないからって師範が熱を出した病み上がりに立ち合いを望んだくせに」

「勝ちだ勝ちだろ？ なあ師範？」

互いに手を伸ばせば届きそうな距離で足を止めた杏の睨みをスルーして宗介を一瞥いちべつする。だが、当の宗介は一切の不服も浮かべずに簡潔に答えた。

「その通りだ。体調不良は言い訳にならない」

「ほら、師範もああ言ってるけど？」

「あたしは認めてない。勝敗が決した後にあんたがやった不要な駄目押しで師範が大怪我して、現役引退しなきゃいけないなくなった事も、絶対に許さない」

「こっわ。折角可愛い顔してんだからさあ、もっと愛想良くして欲しいなあ」

久里須の挑発めいた軽口に、杏は深い呼吸をすると、むしろ逆に怒りを霧散させたように霧囲気を一変させた。

「……それでもあたしは、私怨であんたを痛めつけたりはしない。それは師範とこの道場に対する冒瀆だから」

「考え方が固い。固いよ杏ちゃん。もつと人生エンジョイしようぜ」

杏が半身になり右手を前に差し出す。

「だからあたしは師範から受け継いだ武で、正々堂々とあんたをぶつ飛ばす」

彼女の腸が煮えくり返る憤怒は誰の目にも透けていた。しかし彼女はその激情を制御し、正しく己の力と化してさえた。宗介は満足そうに目を細めて顎を引く。弟子が、恋人が、真の強者に育ってくれた事に感銘を抱いた。

「そんな盛り上がってもらえると俺も看板貫いに来た甲斐があつたわ」

「看板、ねえ。ここに在籍してた時も武道の礼節に全く理解を示さなかつたあんたが、暇潰しだろが道場の看板なんか欲しがるとは思えないんだけど？」

杏の全てを見透かしたかのような視線に、久里須は薄ら笑いを浮かべた。

「ご明察。こんな化石みたいな道場なんて何の価値もないわけよ。今時、実戦技術なんて流行るわけねーじゃん。実際今も師範と杏ちゃんだけだろ？ ああでも杏ちゃんがフィットネスコーチとして手取り足取り教えてくれるなら客が集まるだろうね」

露骨に杏の誇りを嘲るような物言いをするが、彼女の心に広がる水面は揺らぎすらない。普段は年相応に感情豊かな女学生だが、道場に足を踏み入れた彼女は百戦錬

磨の達人となんら遜色ない。そんな杏に久里須は言葉が続ける。

「俺が欲しいのは、この土地つてわけ」

宗介や杏に驚きは無い。都心からさほど離れない閑静な住宅街に佇む、千代田流古武術の道場兼、宗介の自宅が建つこの土地はそれなりの価値がある。

何年も前の話になるが、明らかに堅気と思えない柄の悪い不動産屋に売却の話を持ち掛けられ、断つたところ嫌がらせが一月ほど続いた事もあった。

「チンピラみたいな風体になって戻ってきたと思つたら、地上げ屋の手先になつたつてわけね。顎髭似合つてないよあんた」

「いやいや。結構女に好評よこれ。最近セフレめっちゃ増えてさあ。一回整理しようか悩み中なんだよ。ああでも杏ちゃんなら全然受け付けオッケーよ？ 普通に可愛いし、あと前から思つてたけど胸めっちゃデカいよね。師範が羨ましいなあ」

その言葉尻は羨望などではなく、ただの下劣な挑発である事は明白だった。宗介も杏も眉根一つ動かさない。しかし杏の胸中に燃え上がる炎は既に蒼い。

久里須は言葉が続ける。その抑揚と声色は一転して平坦となった。しかしそれが逆にこれ以上ないほど、二人の心を逆撫でした。

「師範。道場破りに負けて看板失うって意味は理解してますよね？」

千代田流古武術が掲げる実戦派という理念は名ばかりではない。看板を望む立ち合

いを仕掛けられて敗れたのなら、自ら立ち退くのが当然という信念を宗介と杏は共有している。

その思いそのままに宗介が肅々と口を開く。

「当然だ」

以前、柄の悪い不動産屋に絡まれた時も同じ話になった。まず相手が用意したのはプロレスラー崩れの用心棒。そして次は元世界ランカーのボクサー。

どちらも引退する前の宗介が悠々と撃退した。

「流石。話が早い。それじゃ開始の合図はいつでもどうぞ」

杏と久里須は既にお互いの間合いで向かい合っている。

「久里須。元門下生の君に、うちの流派について今更説明が必要か？」

久里須が大袈裟に肩を竦めるとヘラヘラと笑った。

「わかってますって。実戦によりいドンなんて合図はない、でしょ。もう試合は始まってんですよね。てか師範が相手しなくて良いんすか？」

宗介を壊した張本人のその言葉に、杏の喉元まで殺気がせり上がる。

「問題ない。杏はこの看板を背負うほどに強くなった」

宗介の即答で、杏は完全に平常心を取り戻す。宗介とこの道場への恩義と敬意が彼女の血潮に乗る。頭は冷たく、身体は熱く火照らせた。

「ていうかあたしの実力なんてあんたが一番知ってるでしょ？」

「はいはい。美しい師弟愛だことで。まあ準備くらいはさせてくださいよ」

ジーンズのポケットからなにかを取り出すと、それを両手に嵌めて見せつけるように開閉する。

「オーブンフィンガーグローブ。これがないと拳痛めちゃうからさ」

「昔から拳が軟弱だったものね。いや、性根から貧しかったのかな。だから小金欲しさにチンピラの使いつ走りなんてやっちゃってる」

「相変わらず師範以外には手厳しいのな。メリケンサックとか入ってないから安心してよ」

「むしろ今からでも取りに帰った方が良いんじゃない？ それかあたしが体調不良になるまで待つ？」

「はっ」

小馬鹿にする杏の口調に久里須が乾いた笑い声を上げるが目は笑っていない。

「あ、ちよい待って。女から電話」

そう言つて久里須が背を向けた。その次の瞬間、身体を反転させて右手で裏拳を放つた。

ブランクを感じさせない鋭さに宗介と杏は驚きを隠せない。

宗介が敗北時、体調不良であったのは確かだが、それでも久里須の実力と才覚は杏と肩を並べていたのを宗介に思い起こさせた。

その裏拳も並の競技者であれば反応すらできずにクリーンヒットしていたであろう。しかし杏は事もなげに突き出していた右手で裏拳を払い上げた。

同時に一步距離を詰め、振り上げた右手で手刀を繰り出す。

鎖骨を狙ったそれはやはり常人では軌道を捉える事すら不可能だったが、久里須はギリギリ左腕で受けた。

杏は反撃を許さないと言わんばかりに畳みかける。上半身が全く揺れない独特の歩法で更に間合いを詰めると、互いの息遣いが直接交わるほどに肉迫した。

杏が最も得意とする間合い。久里須は一旦退こうとするがそれは叶わない。右の踵が、久里須の左の爪先に突き刺さるように押し込められていた。

フットワークを封じられた久里須は、性差による腕力にモノをいわせようと首を抱えにいく。

だが、ほぼ反射的に行われたその選択が過ちだったとすぐに気付いたものの、既 hands 遅れだった。

雑に繰り出した久里須の右手首が杏の両手に捕らえられる。

「やべっ」

焦りの声を上げる久里須とは対照的に、杏は黙って久里須を小手返して投げ飛ばした。

身長差は優に二十センチを超える久里須がまるで手品のように転倒する。

なんとか受け身を取るがこの道場が教えているのが空手やボクシングではなく、柔道や合気道ですらない事は久里須が身を以て知っている。

打投極、全てを内包する実戦武術であり、倒れたから仕切り直しなどというルールは存在しない。

すぐさま杏の踵が久里須の顔面を襲った。久里須はブレイクダンスの要領で身体を捻りながら回転させ、回避と低空の足払いを両立させる。

「ほう」

宗介は思わず感心の声を漏らした。

我流の色が濃いのが、久里須が完全に武術の世界から遠ざかっている事にはや明らかだった。杏とは別の道で久里須もまた、相当の使い手に成長していたのである。

しかしそれでも尚、杏は鉄壁だった。外した踵でそのまま足払いを受けると、「マジかよ」と久里須から驚愕の声が漏れた。

そのまま足刀で久里須の鼻先を蹴り上げる杏。久里須の顔面が跳ね上がり、そのまま後ろに倒れた。その衝撃を利用して後転することで、なんとか間合いを取る事に成



功した久里須だが、その表情にもう軽薄な笑みを浮かべる余裕はなかった。

「……俺こう見えてもクラブの用心棒もやっててさ、師範に倣ってプロボクサーとかプロレスラーボコボコにしてんだけど」

息を切らし、額に汗を浮かべる久里須とは対照的に、杏には一切の変化が見られない。力量の差は火を見るよりも明らかだった。

「だから帰って金属バットでも持つてくればって言ってんじゃん」

「……じゃあお言葉に甘えてなんでもアリでいかせてもらおうわ」

そう口にした久里須が両手首を触り、グローブを締め直す仕草をした。

そして中腰になると、真正面からのタックルを仕掛ける。

如何に体格差があろうとも、真正面からの突撃など杏にとつては愚直以外のなにものでもない。むしろ打撃戦よりも体格差の優劣が出にくい寝技の方が容易よゆういに勝機を手繰り寄せる自信があった。

しかし組まれた次の瞬間、杏の身体を激しい電流が襲った。

「ぐうっ!!」

抗いようのない強烈きょうれつな痺れに全身を硬直させ、そのまま久里須に馬乗りになられる。指先一つ動かせないまま軽薄な笑みを見上げる事しかできない。

「顔は勘弁してやるよ。結構タイプだからな」

そう言うと、腹部に遠慮なく拳を振り下ろした。

「うっ、ぐっ！」

無防備な鳩尾みぞおちを殴打された杏は馬乗りで身体を拘束されたままのたうち回った。

「ほーら。もっぱツイクぞ」

久里須が再び拳を振り上げると、宗介が「待て」と声を掛ける。

「……勝負ありだ」

久里須が立ち上がると頬をニヤつかせた。

「えー。いいんすか？ 看板が賭かっているのにそんな簡単に負け認めちゃって。それとも師範でも婚約者が大事ってか？」

拘束を解かれ呻きながら身体をエビのように縮める杏の横顔を、足裏で踏みつける久里須。

「君の勝ちだ。杏を放せ」

宗介も久里須がグローブの中にスタンガンのようなものを仕込んでいたのは理解していた。タックル前の仕草で発動させていたのだろうと推測する。

それでも宗介と杏の流派に反則負けという概念はない。武器を持つ相手から誰かを守れなければ意味がない。だからこそ宗介はかつての杏を守り、その杏もそんな宗介と流派に傾倒した。

故に不平不満が出るはずもない。

「でもどうしよっかな。用心棒やって声掛けられて、ノリでバイト引き受けちゃったけど、やっぱり師範や杏ちゃんの仲良しだったからな……あ、そうだ。杏ちゃんが一晚セフレになつてくれたら、地上げ屋には俺が負けたって報告しとくつてのは？」

その台詞はどこか白々しい。杏は痛みを伴う痺れの中、そもそもそれが目的だったのではないかとすら考える。

「久里須。一つ忘れているな。この道場にはもう一人戦える人間がいる」

「ええ、いましたっけそんな。もう壊れたポンコツしかいないっしょ」

宗介が歩み寄る。未だに足蹴にされたままの杏は、痺れで満足に身体を動かせないまま、申し訳なさそうに青息吐息の状態で呟いた。

「……師範……すみません」

「今の師範にはこんなもん不要っすわ。正々堂々と勝負してあげますよ。へへ」  
久里須はグローブを外すと、正々堂々を殊更強調して言った。

久里須との組み手が原因で現役を退き、育成に専念していた宗介と、我流とはいえない実戦の中で揉まれ続けた久里須の差は歴然だった。

なにより久里須に壊された右腕という絶望的なハンデ。

それを試合と表現できたのは最初の一呼吸だけで、後はもう一方的な虐待でしかなかった。

全身を殴打された宗介は壁に背をもたれてぐったり腰を下ろしていた。

そんな彼へ尚も追撃しようとする久里須に、痺れが直り始めた杏が涙目で縋るすがように制止するのを、宗介は朦朧もろろとし始めた視界で捉えていた。

「セフレでもなんでもいいからっ、宗介さんをそれ以上傷つけないでっ！」

道場内で初めて杏が宗介の名を呼んだ。

久里須の手がそれのようにやく止まる。後ろから力なくしがみつく杏に振り返った久里須の横顔は、無言で杏の意志を確認するように口端を愉悦に歪ませていた。

杏はうつすら涙を浮かべながらも、久里須を睨みつけながら氣勢を上げるように言った。

「それくらいで済むなら是非もないっての」

握られた拳は屈辱と恥じらいで震えていたがその感情を表に出さないのは、自身よりも宗介のプライドを守る為だった。

敬愛する恋人に育ててもらった自分が、この程度の苦難で臆する姿を見せるわけにはいかない。そんな確固たる思いが彼女の背筋を伸ばす。

それでも宗介は、そんな馬鹿げた提案を受けるくらいであれば、杏の尊厳の方が重いと考えるほど彼女の事を愛しく思っていた。

しかしもう言葉を発する事すら叶わない。弱い自分が恨めしかった。杏に自ら身を投げ出させる自分が恥ずかしかった。

「……とりあえず先に宗介さんを手当てさせて」

「んな大した怪我じゃねーよ。まずはここで一発抜いてくれよ。喧嘩の後ってピンピンに昂たかぶっちゃうからさ。俺もう我慢できないわ。まさか神聖な道場でそんな事できないとか言わないよな？ 負けたのに前言撤回するとか流石にダサすぎだぜ？」

「……つく。言われるまでもないわよ！」

杏は刺々しく言い返すと、ちらりと宗介を一瞥した。その視線から憂いと、それ以上の覚悟が宗介に伝わった。

「さっさと終わらせなさいよ」

「大丈夫。わりと俺って早漏だから。じゃあそこに座って上着脱いでよ」

ふて腐れるような迅速さで服を脱ぐ杏からは、恥ずかしがってやるものかという気概を感じる。

杏は向かい合っていた宗介と久里須の間に割って入った為、宗介からは完全に杏の後ろ姿しか見えなかった。

初めて見た愛弟子である恋人の背中が白く、そして細かった。

さして筋肉質ではない女性らしい肌の上を、桃色のブラの紐が走っているのが妙に艶めかしく感じる。

「やっべ。杏ちゃんってやっぱりめっちゃ巨乳じゃん」

気色ばんだ声でそう言いながら、浮ついた様子でジーンズとボクサーパンツを脱いでいく久里須。だが、宗介からはその豊かな乳房は一切見えない。

初めて異性に晒したであろう杏の乳房を目にする権利があるのは、勝った男だけ。

同様に露出した久里須の下腹部も宗介から確認する事はできない。しかし、ジーンズと下着が床に滑り落ちた際に、あの怖れ知らずの杏の肩がびくりと震えた事から、その威圧感を推して知る事ができた。

「そんなじゃ頼むわ。杏ちゃんフェラチオやった事あんの？」

「……あるわけないでしょ」

「じゃあ俺が指導してやるよ。いつもここで師範に指導してもらってたようにな。へ。あ、これからは杏ちゃんが頑張らないと元師範になっちゃうな？」

「即再戦して、二度と舐めた口利けないくらい叩きのめしてやるから」

杏のその口調は殺意に届きそうなほどの激情を必死に押し殺して凝縮されていた為、日本刀のように冷たく重く鋭かった。



「まあまあ。とりあえず今は口で舐めといてよ。それじゃ、まずは先っぽに挨拶代わりのキスして」

一瞬の躊躇ためらいの後、杏の首が小さく前後し、宗介の耳に唇が何かと触れ合う音が届いた。

「もっと唇すぼめて。押し付けるようにキスしてよ」

慇懃無礼なその言葉に杏の肩が怒りで震えたが、彼女に他の選択肢はない。

ちゅっ、と先程よりも明瞭に唇が押し付けられる音が鳴ると、満足そうに久里須が頭を軽く撫でた。

「そうそう。それを続けて」

その手をまるで蠅のように払い除けながらも、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、と厳かな道場には似つかわしくない愛らしいキスの音が連続した。

「杏ちゃんの唇めっちゃ柔らかくて気持ち良いっすよ」

二人がプラトニックな関係を築いていた事を察していた久里須が挑発するように笑みを浮かべる。そして杏を見下ろし、小馬鹿にした。

「キス上手じゃん。一人で練習でもしてたん？」

凶星を突かれた杏は耳を恥辱で真っ赤に染めながらも、ちゅっちゅと唇で亀頭を啄み続ける。



ここで無様に躊躇ったり、約束を反故にしたりする事は、ひいては宗介の名を汚す事になる。

「舌でぺろぺろって舐めてみて。そうそう。そんな感じ。裏側もね」

宗介から見るのは杏の背中と後頭部、そして久里須の歪んだ笑顔だけ。

「そのまま徐々に根元の方まで舐めていこつか。キスと舌で舐めるの交互にね。そうそう。丁寧だね。いいよ。いい感じ。こっちの方も才能あるんじゃないの？ ははっ。じゃあそのまま玉も舐めてみよつか。一回キスしてみて。おお、甲斐甲斐しくていいね。もう片方の玉も。そんじゃ舌で持ち上げるようにゆっくり優しくな。うん、それくらい。そんで舌の上で転がすように舐めてみて……上手い上手い。気持ち良いわ。そんじゃ頬張ってみようか。口に入れて、そう、そんでさつきみたいに舌で転がして、いいね、そんでちよつと吸ってみて……ああ……やつべ、マジ気持ち良い。師範。杏ちゃん玉舐めるのめっちゃ上手いですよ」

宗介の意識が敗北感で更に暗闇に引きずりこまれていく。

「そんじゃ啜えよつか。俺の太いし長いから、顎が疲れないようになるべく早く出してやつからさ。優しいだろ？」

それでも宗介の心は折れない。彼から杏の表情を窺い知る事はできないが、きつとそれは不屈の意志で燃えていると確信していたから。ならば師である己が折れるわけ

にはいかない。

宗介は在りし日の杏を思い出す。通り魔を前にした彼女の瞳。恐怖に打ち克とうと、理不尽な暴力に屈して堪るか、年端もいかなない少女が膝を震わせながらも絶体絶命の逆境に立ち向かおうとしていた。

今思えば彼女の高潔な強さにその時から惹かれていたのかもしれないと宗介は考える。

宗介の途切れそうな意識の中に映る久里須は、あの時の通り魔と同じだった。

絶対的弱者と決めつけていた相手からの歯向かいに、面白くなさそうに舌打ちをする。

「久里須。もっかい言っとくね。次は必ず、あんたをぶっ飛ばすから」

杏はそう言つてフェラチオを始める。亀頭を唇で挟み込むと臆する事なく不敵な声色で言った。

「で、どうすればいいわけ？ なにぼさつとしてんの。さつさと教えなさいよ」

「いいね。そうでなくっちゃ」

久里須は舌を鳴らすと口角を持ち上げたが目元は笑っていない。

「そのまま奥まで啜えろよ」

「全部？ こんな無理に決まってんじゃない。馬鹿じゃないの。寝言は寝て言え」

「あーもううるさいな。できるとこまででいいからやれって」  
宗介の目が、杏の後頭部が恐る恐る前方に動いたのを捉えた。それと同時に苦しうな杏の吐息も届く。

「どうよ。初めてのちんこの味は。あ、初めてですよね？」

そう笑う久里須は途中から宗介の方を向いていたが、宗介に返答する力は残っていない。

「あつ、ちよつ、杏ちゃんつ、ちんこ嘔むなつてつ、わかつたわかつた、そう睨むなよ……くつくつくつ。本当師範の事好きなのな。おつ、結構深くまで啜えられたじゃん。流石道場仕込みのナイスガッツ。そんじやもつかい先つぽの方まで口を戻して」  
指示通りに首を後ろに振ると、唇がカカリに引つ掛かり微かではあるが、ちゆく、という音が彼女の背中を見守る宗介に届く。

「そんでさつきみたいに奥まで唇滑らせて、引つ込めてを繰り返す」  
ちゆく……ちゆく……。

「慣れてきたら舌使つて唾液塗る事も意識してみ」  
くちゅ……くちゅ……。

「そうそう。その調子で段々スピード上げてけ」  
くつちゅ、くつちゅ、くつちゅ。

「うわ、自分から舌を巻きつけてきてやんの」

ちゅぽんっ、と軽妙な音と共に杏が口を離すと、不服そうに剣呑な声をあげた。

「あんたが舌で唾液塗れつつたんでしょ。そうでなきゃこんなきつたないモノ触りたくもないわよ」

「いや、教え甲斐があるなって驚きよ」

「……なんでも良いから出すものさつさと出して」

杏のその言葉には、久里須よりも早く宗介の手当てをしてあげたいという切実な願いに溢れていた。再び杏の首が前に動き、そのまま前後する。

「わかってるって」

くちゅっ、くちゅっ、くちゅっ。

フェラチオの音は滑らかさと潤沢さを増していく。それらは全て宗介の為。しかしその想いを久里須は快樂として甘受する。そんな久里須の優越の表情が宗介と正面からぶつかった。

「あゝ、杏ちゃんの舌遣いマジできもちゝ、めっちゃ巻きついてくるんですけど」  
久里須が手を杏の頭にそっと乗せる。

「吸いながらやってみて」

その指示に呼応して、口淫の音が更に淫らに湿る。

じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ。

「マジ最高だよ杏ちゃん。ついでにブラ取っちゃおうか」

その言葉に杏は躊躇いを見せるが、

「早くしろって。出してやんねーよ？」

横暴な声に、反抗的な雰囲気を作りに醸し出しながらも後ろ手でブラを外した。

桃色の大きなカップのブラが道場の床に落ちる。生まれたままの杏の背中へ、宗介にとっては輝かしいばかりに魅惑的だった。

しかし彼からは目にする事ができない、彼女の持つ最も女性的な部分に久里須は喉を鳴らした。

久里須は宗介に視線を向けると得意気に微笑む。

「杏ちゃんの爆乳、お椀型でめっちゃ形綺麗ですよ。しかも乳首の色がうっすいのなの。良かったですね」

そして杏に視線を戻し、指で乳首を軽く弾いてみせた。

「後でたっぷり可愛がってやるからな」

「んっ」

それだけで杏が弱い声と共に肩を震わせる。

「良いモノ見せてもらったし、師範も限界っぽいから、とりあえずイってやるよ」

「まあこれからもっととはしたくない姿を晒すんだけど」

腰を引いて結合を解くとくつくつと笑った。

「こっちの穴もすっかり俺の形になっちゃったな。ま〇こも物欲しそうに涎垂らしちゃって」

杏は背後で久里須がゴムを外す音を聞いた。しかしこの一発で済むなどと楽観的な考えは持たずに身構える。身体が弛緩しきつており、指の先まで甘い痺れが支配している。久里須の言葉通り、自身の肛門が男根の太さで形取られたままヒクついているのは無念の極みだった。口を開けた陰唇が止め処なく愛液を垂らしているのもしようがない。

それでも心だけは追撃に備えて引き締め直す。予想通り久里須は二度目の挿入の動きを見せた。

(……来るなら来なさい)

氣力が回復していくと同時に、肛門が閉まっていくのを感じた。肘や膝で感じる道場の床は、宗介との鍛錬の日々を思い返させる。己を成長させてくれた恩。それを想えば心が折れる事はない。

ただ一つ想定外だったのは、閉まりつつある肛門にキスをした亀頭の感触が先程と明らかに違う事。

ダイレクトに伝わる熱。そして雄々しい肉の質感。

それだけで杏の全身に電流が走った。その所為で杏の初動が遅れた。

コンドームを装着していない亀頭が、再び肛門をぐにやりと押し広げる。

「……ちよつと久里須、あんたっ……」

ようやく抗議を唱えた時にはもう遅かった。久里須の両手は杏のむっちりした腰を逃がさんと掴んでいたし、杏の肛門ももはや男根を異物として頑なに侵入を拒む事はできない。

にゆるん、と滑らかな音を立てて、一息に久里須と杏が再び結合する。

「ああっ！」

鮮明な凹凸。浮き出た血管の脈動が伝わる密着感。筋肉の塊である硬さ。そしてなにより火傷やけどしそうな熱。それらが杏の脈拍を、体温を一気に引き上げた。

「はい。また根本まで………挿入っ」と

久里須の陰毛が臀部に押し付けられる。下腹部で尻肉がむにゆりと押し潰される。肉竿の先端から根本を全て呑み込むと、その穂先に押し出されるように杏はほぼ無意識に言った。

「……すいません。イキます……」

杏の後頭部が宗介に見えるほど深々と頭を下げる。

次の瞬間、腰回りの肉がビクビクッと激しく波打った。その痙攣は背中にも伝播する。杏はそれ以上声を上げなかった。上げられなかった。

久里須は生の男根で、生の絶頂した肛門を味わいながら、軽薄な笑みを浮かべた。「普通アナルセックスの挿入感って入口だけなんすけどね。杏ちゃんのお尻の穴ってちんこ全体をみっちり締め付けてくれるんすよね」

そして腰を振り出す。挿入だけで達した杏の事情など知った事ではないという風に。「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ♡」

杏の声はこれ以上ないほど甲高くなっていた。聞く者全てを魅了する色香で溢れていた。耳にしているだけの宗介から我慢汁が溢れるほどだった。

そんな甘美な嬌声を享受しながらも、杏の純真な肉の輪で生の男根を擦れる久里須の快楽はどれほどのものなのか。宗介には想像だにできなかった。

宗介の視線に嫉妬を感じたのか、久里須は益々口端を愉悦で歪めた。「ぷりぷりですよ。杏ちゃんのケツマ○コ。こうして生でシコるともう他にオナホ要らないなってなります」

杏の肛門を性玩具扱いしながらパンパンと軽快にピストンする。

「あんっ、あんっ、ああっ、はっ、あっ♡」

失礼極まりない言葉に、杏は怒りを表明する暇もない。



「だ、だめ……ゴム、着けて………やつ、あつあつ、すごつ、あつ、あつ、いっ♡」  
それでもコンドームの装着を求める。

「だって一個しか持っていないもん。それとも師範に買ってきてもらおう？」

「そ、そんなの……ダメ」

杏は殆ど額を床に擦りつけながら首を左右に振った。尊敬してやまない、そして恋心を募らせ続けてきた宗介に、そんな役目を押し付ける事などできるはずもない。

「じゃあこのまま続けちゃいまーす」

多少なりとも一発目の精液を纏った男根による摩擦は、グチュグチュズボズボと一段と卑猥な音を立て、そしてその潤滑さも増した。

「ああつ、いっいっ、いっいっ♡ やつ、だめえ……熱い♡」

宗介にそんな使いつ走りをさせるわけにはいかない。その気持ちに偽りはなかった。しかしいざ生挿入が続行されるとなると、どうしても抗いきれない感情が灯っていく。それを口に出すわけにはいかない。せめて心の中に押し留める。

（……やつぱり久里須の生ちんぽ、気持ち良い……ゴツゴツしてて、凄く遅い……）  
杏は自戒するように奥歯を噛み締める。

（………馬鹿つ、あたし……なに考えてんのよ……）

気持ちを引き締め直すと、嵐のような快感の中、息も切れ切れに言う。

「……せめて……外で出しなさいよ……」

「なんで？」

「なんでって……それは……」

その続きを口にしようとして杏は顔がかあつと熱くなった。

中で射精されるのが不快だったから？ 違う。

杏が思わず言ってしまった言葉。それは、

「だって……妊娠しちゃうじゃない」

だった。

勿論杏の性知識が欠落していたわけではない。

生の肉槍に突かれた事で、己の肛門が性器になったと心身が勘違いしてしまった。

男根を悦ばせ、放出された子種を受け取り、繁殖の宿となる肉穴と化している事に

何の疑いもなかった。それほどに雌として屈服させられていた。

杏はその失態を誤魔化すように言う。

「……あなたの精子なんて、受け取りたくないに決まってるでしょ」

そうは言っても既に精液を纏った男根はグチュグチュと抽送を繰り返し、腸壁に泡立ったそれを塗り付けていた。まるで媚薬のように下腹部がジンジンと熱く疼く。

更に杏を羞恥させたのは、摩擦している部分とは関係ない膣奥で起きたとある変化。

(……やだ………子宮が降りちゃってる……)

肛門を犯されながら子宮の口を開いて、精子はまだかとねだる自分の身体に杏は思わず涙を流した。

(お願いだから、こんな奴の赤ちゃんを欲しがらないで……)

確かに久里須の男根は雄として一級品なのだろう。男性経験に乏しい杏でもそれくらいはわかる。まるで角のように荒々しく屹立するそれは強大で威圧的だった。肉竿に浮かぶ青筋は目にするだけで腹の奥が締め付けられる。

(……宗介さんの目の前で、宗介さん以外の精子で妊娠したがるらないで……)

それでも久里須の力強さによって女の本懐を感じてしまっている自分を許せなかった。

そして自分の身体が生殖行為をしているのだという認識は、彼女の恥じらいを更に色濃くさせた。

宗介も杏も、心のどこかでアナルセックスは本当の性行為ではないという気持ちがあった。

しかし杏の身体はもう、子をなす為の繁殖行為と相違ないと判断してしまっている。実際妊娠などするはずもない。しかしこのまま中に射精されたら孕んでしまうのではないかと感じるほどに、久里須の肉槍に雄を感じてしまっていた。そしてあまつさ

え子宮は種付けを受ける準備を整えている。

それは杏に久里須と子作りセックスをしているかのように錯覚させた。

(……違う……そんなのじゃない……)

上辺で否定しても奥を突かれる度に淫らな声を上げ、カリが肛門を捲る度に背筋が痺れた。

「あつ、あつ、あつ……だめつ、カリ、深い……お尻の穴、捲れる……」

非難めいた悪態を口にしようとしたはずだった。しかし口から漏れるのは媚びるような甘いよがり声。

「やだっ……やだっ……こんなの、戻らなくなっちゃう……お尻の穴がおま○こから戻らなくなっちゃう……あつ、あつ、すごつ、い……おちんちん、おつきい」

己の醜態が耐え難い杏は、目尻から大粒の涙を流した。

軽快に腰を振りながら久里須が鼻で笑う。

「大丈夫だって。基本的に杏ちゃんの肛門キツキツだからすぐ元に戻るよ。でも今はこのままふわふわのトロトロでちんこ気持ち良くさせる穴でいてね」

久里須が腰を振る度に杏の肛門が鳴らす、グチュグチュという粘り気のある音は宗介をもどかしくさせた。さぞかし想像を絶する快感を、その雌穴で味わっているに違いないと想像させる。

宗介はそんな自分を恥じた。杏がどのような思いでこんな仕打ちを受けているか、思いを馳せると、不可抗力とはいえ勃起している事にも罪の意識を抱いた。

杏も同様に胸の痛みが最高潮に達している。

そんな二人の心情を感じ取った久里須は、丁度良い余興を考え付く。宗介と杏を繋ぐ清廉な赤い糸など、久里須にとつては性的興奮を昂らせる餌でしかない。

ピストンを休止すると上体を前傾させた。杏の耳元で悪魔の囁きを投げかける。

「杏ちゃんだけ気持ち良くなっちゃって師範可哀想」

その言葉は杏の心臓を突き刺した。

「ほら、師範の股間見てみ。相変わらずギンギンだぜ。杏ちゃんにはわからないだろうけど、ああなったら男は苦しいんだよな。シコりたくてシコりたくて仕方なくなるんだよ。俺はこうやって杏ちゃんのアナルでシコシコできるから満足だけど」

そう言いながらトントン、と軽く腰を振る。

「あっ、あっ♡」

宗介に対して申し訳ない気持ちでいっばいなのに、久里須に指摘された通り快楽に抗えないでいる。自分が喘げば喘ぐほど、宗介に菌痒い思いをさせていると考えてしまう。

そして宗介も己がいきり勃てば勃つほど、杏の覚悟を汚してしまうと悔恨の念に囚

われていった。

久里須は再び上体を起こした。ピストンを再開しながら言葉が続ける。

「師範だけに苦しい思いをさせるのは杏ちゃんも辛いよな？」

「やつ、あつ、あんっあんっ♡」

杏は久里須に、そして自己に燃え立つ嫌悪の炎を燃やしながら喘ぐ。それはまるで久里須からの問い掛けを肯定しているかのような嬌声だった。

「師範に楽になつてもらいたいよな？」

「あつ、あつ、いっ♡」

当たり前だ、と杏は言い返したかったが言葉にはならなかった。心底自分が情けなかった。

「じゃあさ……」

再度久里須が前傾し、宗介には聞こえないように杏になにか耳打ちをすると再び上体を起こしてピストンする。

パンパンパン。

「いっっ、いっっ、あつあつ、はっ、ああんっ♡」

久里須の二度目の射精が近い事を杏は感じ取る。膨張し、硬度を増す男根を、初々しい肉の輪で感じ取る。己の絶頂も近い。いや、ずっと達しているようなものだった。

自分はどれだけ辱めを受けても良い。しかし宗介をさておいて、自分と久里須だけが気持ち良くなる事は杏には耐えきれない。

杏は涙を流しながら、久里須に耳打ちされた提案を宗介に伝える。

「……宗介さん……あたしがはしたくない姿を晒したばかりに苦しい思いをさせてしま  
いすみません……どうかオナつてください……あたしが久里須の生ちんぽを肛門  
に生ハメされてよがってる姿をオカズにして……その勃起しているおちんちんからザ  
ーメンを抜いてあげてください……あたしが情けないばかりに……すみません」  
宗介の胸はいくつかの形容し難い感情で溢れかえった。その中にはネガティブなも  
のも存在したが、とりわけ杏が愛しくて堪らなかつた。久里須がケラケラと笑いなが  
ら腰を振ってはズブズブと音を鳴らしては、杏の肛門を肉槍で弄んでいたが、それ  
に対する怒りや嫉妬は二の次だった。

宗介は少し腰を上げると袴を下にずらし、勃起した男根を晒して座り直した。そし  
て右手で掴むと扱き出す。

けして己の欲情を満たす事が目的の自慰ではなかつた。杏にそこまで言わせて、自  
分だけ傍観者を気取り続ける事など許せるわけもない。彼女だけに赤恥を搔かせるわ  
けにはいかない。

自身を再起不能にしたかつての弟子に許嫁を犯されながら、自分を慰める姿は誰も

が無様だと目を背けるだろう。

しかし宗介は折り目正しい正座で逸物を扱き続けた。その佇まいは勇壮ですらあった。宗介は杏を失望させたくない一心で胸を張る。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ♡」

久里須に後ろからズンズンと突かれながら、杏は己の間違いに気付いた。心から宗介に楽になって欲しいと願ひ、久里須の口車に乗ったのは誤りだったのだ。

久里須の男根で粗雑に擦られ続けた杏の肛門は、火傷したように熱を持っていた。頭の中は快感の火花がバチバチと散り続けている。そんな切迫した状況で失策に陥った彼女を責める事は誰にもできない。

杏は再び大粒の涙を流した。それは当然宗介への申し訳なさが大半を占めた。そしてそれ以上に涙を熱くさせた想いがある。

「……宗介さん……愛します」

宗介が自分と同じ立場になる為に、辱めを甘んじて受け入れてくれた事。そしてなによりその姿が堂々としていた事。杏は久里須に肛門を犯されながらも、宗介に恋い焦がれた事を誇りにすら思った。

「僕も愛しているよ」

このような状況においても二人の想いは力強く通じ合っていた。



しかし身体が重なっているのはどうしようもなく久里須だった。

「いやあ、お二人の絆の強さには感動しちゃいますねえ。俺も涙が零れちゃいそうですよ。主にちんこの先から白い涙が」

白々しくもそう口にしながら杏の柔肌を掴み、性器と成り果てた肛門を擦っては昂つていく。久里須の肉槍は杏の中でビキビキと音を立てて滾っていた。宗介と杏の純情を肴に、ただただ性欲発散の為に腰を振る。

「もっと師範にエロい声聞かせてあげようぜ」

ぐいぐいと下腹部を桃尻に押し付ける。

「あつ、ああつ、いつあつ♡ いっ、いっ、そこっ、だめっ、深すぎる♡」

絹を裂くような喘ぎ声に、宗介の男根が反応して昇りつめようとする。

「その調子その調子。ほら見てみ。もう限界って感じだぜ。師範のちんこ」

その言葉を肯定するように宗介が謝罪する。

「……杏。すまない」

杏は涙を流しながら首を横に振った。

「いえ……どうか楽にしてあげてください」

二人の生真面目で純朴なやり取りを久里須が嗤う。そして宗介にオカズを提供してやろうと言わんばかりに激しく突いた。道場に乾いた音が連なる。

「はい師範どうぞ。ケツアクメしてトロトロの杏ちゃんて抜いちゃってください」  
「あつあつあつあつ♡ やつ、ちんぼ強いっ……あつ、イクっ♡ ああイクっ♡」

今日一番の蕩けた嬌声に、宗介が肩をいからせて顎を引く。小さな呻きを上げて射精したのを見届けると、久里須はピストンを更に強めた。

「あーあ。師範のが先にイっちゃった。ほら、杏ちゃんもイってやれよ」

「だめっ、だめっ、激しっ♡ おま○こイクっ、イクイクイクう♡♡♡」

一際激しい絶頂を迎えた杏の目の前に、宗介の精液が付着した。それは床に着弾し、一滴たりとも杏に届く事はなかった。杏は沈痛な眼差しでそれを見つめながら、久里須の剛直を根本まで押し込まれた。

突き上げた腰がピクンと跳ね上がり、太ももはブルブルと震えた。目の前が真っ白になり、宗介の白い精液が視界に溶けていく。

あれほど熱を持っていた肛門がやけに寂しくなったかと思うと、後頭部になにかが飛散したのを感じた。久里須が外に射精したのを悟る。

続けて道着を羽織っていない部分の背中や腰にまき散らされた精液は、その粘度や量が宗介のそれとは比較にならない事を否応なしに感じさせられた。久里須は二度目の射精にもかかわらずである。

宗介の男性器もけして小さくはないのだろうが、それでも久里須の形を刻まれて開



いたままの肛門が、どちらの幹がより太いかを如実に伝えてくる。

わざわざ背中に精液を射ち付けたのも、雄としてどちらがより優れているかを証明する為だったに違いない。そんな久里須の心根を杏は忌み嫌った。

自分が犠牲になれば良いと考えていた。しかしその浅はかさが宗介に恥を掻かせてしまった。杏はその事を悔いた。

それでも久里須の肉棒を再び挿し込まれると甘えた声で鳴きながら潮を噴いた。自分が情けなかった。久里須が肛門を使って、尿道に残った精液を処理する前後運動を行う度に、杏の陰部はピュツ、ピュツ、と道場の床を湿らせた。

締め付ける肛門に搾り取られた精液が、雌穴と化した肉壁にドクドクと注入されていく。ただでさえ焼けるように熱かった胎内が、更に溶岩を流し込まれたかのように煮立った。杏の身体はその熱で悦ぶように震える。

道場の床が益々濡れていく。愛液と零れた精液。そして潮。更には杏の涙。

「……やだ……もう射精しないで……これ以上おま○この中、ザーメンで熱くさせないでよ………やっあ、嘘……まだビュルビュル来て……あぁっ、はっ、あっ……」

「穴全体でぎゅうぎゅうに搾ってきてんのは杏ちゃんだぜ？」

杏はその言葉に異を唱える事はできずに、ただただ己を恥じて耳を真っ赤に染めた。

己の肛門のヒクつきようが、射精をおねだりしていると言われても仕方がないほどに、艶めかしい蠕動ぜんどうを繰り返しているのを自覚していた。

事実根本まで挿入されながら精液を放出されると、杏の身体は熱い子種に満たされる至福で腰を揺らした。

気が付くと宗介の男性器は萎れかけていたが、久里須の肉槍はまだまだ剛性を保っていた。それどころか再び雄叫びをあげそうな予兆を感じる。

「あらら。師範の小さくなっちゃってんな」

そう笑いながら腰を振る久里須に、杏は激しい憤りを覚えた。

それがどうした。それが普通だ。馬鹿にされる謂れはない。杏はそう噛みついてやりたかった。しかし彼女の口から漏れる声は彼女の意志とは関係ないものだった。

「あっ、あっ、あっ♡」

「次は最初から最後まで中で射精してやるからな」  
まるであたしが欲しがっているかのように言うな、と彼女は苛ついた。

「やっあっ、いっ、いっ、あっいっ……硬っ、い♡」

しかし膣はその言葉でびゅっびゅと潮を噴いた。

「嬉しい？」

「……しく……ない」

なんとかかそう答えたものの、杏は否応なしに想像してしまう。主な射精は外で行い、肛門によるお掃除フェラによる精液だけでこれだけ昂ってしまった。では最初から最後まで中で射精されてしまったら、一体どうなってしまうのだろうか。

「あっ、あっ、あっ、あっ♡ イクっ、イクっ♡ イってるのに、またイっちゃっ♡」  
「声えっろ。また中出しキメてもらえると思って高まっちゃってる？」

「……馬鹿じゃないの……」

悪態をつきながらも、脳裏に到底自分のものとは思えない言葉がよぎった。

その声色はあまりに自分と似通っていた。

杏は必死に頭を振ってその声を追い出そうとする。

(……欲しい……この遅いおちんちんの中出しザーメンが欲しい……)

そんなわけがない。

(強い雄に犯されたい)

うるさい。あたしが身を捧げたいのは宗介さんだけだ。

なんでこいつの男性器はいつまでも硬く太く、力強いままなのだろうと杏は辟易とした。対照的に宗介の逸物はもう完全に萎れていた。しかし戦意まで喪失していないのは彼の眼差しから伝わる。

宗介が最後まで見届けようとしてくれている。杏の心を奮い立たせるにはそれだけ

で十分だった。

そんな彼女を襲う久里須のピストンは、無情にも益々狂暴になる。

「あつあつあつあつあつ♡」

しかし彼女の声色は桃色一色に染まっている。杏の肛門は大木のような肉竿も、それによる荒っぽい抜き差しも、ヒリヒリと焼きつくような快樂で溺れるようになっていた。

カリに捲られる度に吸い付いて引つ張られ、奥までねじ込まれる度に切羽詰まったよがり声が道場に響く。

絶え間なく杏に与えられ続ける快感は、彼女から平衡感覚を失わせた。視界が霞むのは涙の所為だけではない。

「あついつ、いついつ、だめっ、勃起ちゃんぽ膨らんだ……拡がる……まだおま〇こ拡がっちゃう……ああいつ、あつ、いつ♡ おっきいのだめっ、だめっ♡ やつあつ、このおちんちん、おつきい♡」

男性器に關してはすっかり臨戦態勢を解いた宗介の前で、久里須の豪壮な勃起っぷりを甲高く語るのは胸が痛んだ。

しかし青筋を立てた竿とパンパンに膨張した亀頭で奥深くを貫かれると、抗いようもなくその肉槍の苛烈さが口から漏れた。

「……やだ………久里須のちんぽ、強い………♡」

宗介が微かに顔をしかめた。杏の胸がチクリと痛む。今すぐ自分の口を縫い合わせたかった。屈強な男根をねじ込まれる度に、まるで仇敵を褒めたたえているかのような自分の口を塞ぎたかった。

杏は道着の袖を噛もうとする。

久里須はそんな杏を躡けようとばかりに腰をぶつける。

パンパンパンパンパンッ。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

久里須が息を切らしながらも言う。

「師範に俺のちんこどうなってるか教えてやれよ」

通常であればそんな提案など怒気で一蹴していただろう。しかし今の杏は少しでも宗介に対して誠実でいたかった。こんな姿を晒しているからこそ、せめて隠し事だけはしたくなかった。

「……宗介さん……久里須のおちんちん………精液出したくてパンパンになってます………あたしのお尻の中でガチガチで、熱々で………今にも破裂しそうなくらいに勃起してます………」

「大きい好きだよな？」



「あぁっ、あっあっ、やっ、激しっ、あっあっあっ♡」

「好きだよな？ 大きいちんこ？」

「す、好き、だから………あっいい、いっ、いっ、イク、イク………大きいちんぽ、好きだから、そんなっ、あっあっ、だめっ、そこっ、すごいつ♡」

宗介に向けられた久里須の笑みは、ただひたすらに邪悪だった。宗介はそれを真正面から受け止める。

「じゃあ杏ちゃんの大好きな巨根で、一緒に気持ち良くなっちゃいますね」  
握られた杏の拳が怒りと悔しきで震える。

久里須の腰つきは、杏の肛門を性玩具のように愉しむものだった。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

それでも杏は蕩けに蕩けた声を上げ、握った拳は更にやりきれない思いで固まる。

「中出しも好きだよな？」

「やっ、あっ、イクっ、イクっ♡」

「な？」

杏は小さく頷いた、そして額を床に押し付けて、消え入りそうな声を宗介に向けた。  
「……見ないで……久里須に種付けされるところ……見ないでください……」

あまりに悲痛な声だった。宗介は少しでも杏の尊厳を守りたいと瞼を閉じた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト  
「ノックタリッシュノベルズ」  
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!  
ジャンルにとらわれない  
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界の  
ドキドキ  
キアラノベル

ドキドキキアラノベルな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫